

## 論文の内容の要旨

論文題目 ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学

氏 名 千葉 雅也

本論文は、ジル・ドゥルーズおよびドゥルーズとフェリックス・ガタリの哲学的テキストにおける「生成変化 *devenir*」論の文脈から、その理論的かつ実践的な意義を改めて見いだそうとする。「ドゥルーズ哲学」を、総体として「差異 *différence*」の哲学と、絞って「出来事 *événement*」の哲学と見なしうるならば、〈異なるものごとへ変わるという出来事〉の哲学が「生成変化の哲学」である。生成変化論は、ゆえにドゥルーズ哲学の全域に及ぶため、本論文では、初期から晩年までの幅広いテキスト分析を行う。構成は、全二部である。

第Ⅰ部「外在性の平面」では、ドゥルーズ＋ガタリ『千のプラトー』（1980年）第十プラトーから生成変化論のフレームワークを抽出し、その淵源を、初期ドゥルーズのヒューム解釈『経験論と主体性』（1953年）にとって核心的であった「関係の外在性 *extériorité des relations*」テーゼに求める。生成変化とは、他なるものごとへの複数の「外在的」な「関係」の布置それ自体としての、いわば〈関係束〉としての自他が〈組み変わる〉ことである。ドゥルーズ＋ガタリは、「常識」と「良識」に統御されない生成変化のダイナミズムを言祝ぐが、それは、万象の渾然一体ではなく、互いに区別される〈関係束〉の多様な〈組み変わり〉である。そして、第Ⅱ部「個体化の要請」（第5章～）では、そうした諸々の〈関係束〉のアドホックな——状況に応じての——「個体性」の肯定を、「全体性」から〈シャープ〉に「分離」する他者性の肯定として解釈する。以下、各章の要旨を示す。

第Ⅰ章「生成変化のリアリテ——『千のプラトー』第十プラトーから」。上記のように、『千のプラトー』での生成変化を、〈関係束〉としての自他の〈組み変わり〉と規定する。

また、ドゥルーズ+ガタリにおけるスピノザ的「心身並行論」の検討、そしてカトリヌ・マラブーによる「可塑性 plasticité」の哲学との比較により、生成変化は、生物の進化や整形手術といった身体の自然的・技術的「変態 métamorphose」をも含意しうる、と主張する。

第2章「万物が観想する——ドゥルーズのヒューム主義」。『経験論と主体性』でのヒューム主義から、《一者-全体》の実在を認めない存在論を取りだす。世界とは、断片的なものごとの現れを「想像」において「連合 associate」した「結果=効果 effect」であり、そして、世界のいたるところに、互いに分離した想像する「精神」が在る。フィクションを存在論的に一次的とし、かつ「汎心論」に似るこのヒューム-ドゥルーズの存在論の骨子を、他方で、ヒューム主義からあらゆる出来事の絶対的「偶然性」の肯定を読みとっているクァンタン・メイヤスー (Quentin Meillassoux) との比較によって、明確にする。

第3章「存在論的ファシズム——バディウのドゥルーズ批判、存在論と精神分析の闘」。ドゥルーズの「差異の哲学」は、従来の研究ではしばしば、唯一の生きた全体である実在的宇宙への「内在」を求めるベルクソン主義——いわば〈生氣論的ホーリズム〉——の発展形と見なされてきた。しかしアラン・バディウは、ベルクソンに立脚するドゥルーズのいわば〈存在論的ファシズム〉を批判した。そこで、この批判への対抗として、本論文では、世界を「全体化不可能」とするヒューム主義者ドゥルーズを際立たせる。ところが、60年代後半のドゥルーズは、この「全体化不可能」性を、(ベルクソンのな)《一者-全体》まるごとの——論理的に一つの——存在論的《欠如》として扱い、この《欠如》こそが一つの《存在=出来事》であり、そこにおいて、複数の出来事がすべて「集約」されるという考えを示す。この考えを、本論文では〈構造主義的ホーリズム〉と呼ぶ。バディウの批判は、実のところ〈構造主義的ホーリズム〉への批判であり、それは、ジャック・デリダによる「否定神学」批判、および、東浩紀やマラブーら〈ポスト・ポスト構造主義〉世代によるデリダ自身への「否定神学」批判と平行である。本章では、ポスト構造主義から〈ポスト・ポスト構造主義〉への移行として〈複数的な差異の哲学〉から〈個体の変態の哲学〉への移行を見だし、両者が、先駆的にドゥルーズにおいて総合されていると考え、その論脈においてドゥルーズは、彼自身の〈構造主義的ホーリズム〉から外れていくと主張する。その際、60年代ラカンが、《欠如》へと純化されず残る「対象 a」の重視へ向かったことを検討し、そして『アンチ・オイディプス』(1972/73年)での「欲望する諸機械 machines désirantes」概念が、元々「対象 a」に由来することから、ドゥルーズ+ガタリと60年代以後のラカンは、共に、《欠如》の理念的一次化の解除へ向かったと評価する。

第4章「永劫回帰は「結婚指輪」なのか?——『ニーチェと哲学』の脱構築」。本章では、ドゥルーズにとって〈構造主義的ホーリズム〉の象徴である「永劫回帰」の円環が、『ニーチェと哲学』(1962年)においては、「異性愛規範的」と言える「再生産=生殖 reproduction」の当然視——永劫回帰は「ディオニュソスとアリアドネ」の「結婚指輪」であるという喩え——を含んでいると見なし、これをクィア・セオリーの観点から脱構築して、「独身者の

共同性」へ向かうドゥルーズを、「夫婦の問題」を特権化するドゥルーズに対抗させる。

第5章「潜在性、個体化、現働化——『差異と反復』と思考の実践」。ドゥルーズの著『差異と反復』（1968年）においては、「イロニー」へと向かいすぎず「ユーモア」へ〈折り返す〉ことが、個体化の要請であると主張する。過度のイロニーとは、「解」を《欠如》する「問題」それ自体の理念への上昇であり、逆にユーモアは、複数の解への下降である。この個体化論は、しかし、それでも〈コミュニケーション必然性〉としての全存在者の「集約」を人間中心的に予定しようとする。そこに介入し、本章では、ドゥルーズが抑圧していると目される、分離する他者（暴）力への対峙というテーマを露呈させる。

第6章「裂け目の深さ——『意味の論理学』と「器官なき身体」」。本章では、一方で『意味の論理学』（1969年）の「表層」（出来事の領野）が〈構造主義的ホーリズム〉を成していることを示す。他方、分裂症的な「深層」における——アントナン・アルトーに由来する——「器官なき身体 Corps sans Organs」の概念を、個体化を担うものと見なし、その本性を、断片を全体化せずにとめる、「共立 *consister*」させる「イマージュ」として規定する。

Interlude「ルイス・ウルフソンの半端さ」では、『批評と臨床』（1993年）所収の「ルイス・ウルフソン、あるいは手法」を検討する。分裂症者と自称したウルフソンは、耳にする母国語のフレーズを、複数の外国語の要素によって再構成するという症状を持つが、こうして作られる〈多言語のアジャンスマン〉を、——ニコラ・アブラハム+マリア・トロークの多言語精神分析を参照しつつ——複数の他性に曝されて〈多傷的〉である「器官なき身体」——資料体=身体（コルプス）——として解釈し、その〈多傷性〉を「小さな健康」と化して「セルフエンジョイメント」することを〈成功したメランコリー〉と呼ぶ。

第7章「彼岸のエコノミー——『マゾッホ紹介』と超越論哲学」。本章では、『マゾッホ紹介』（1967年）における、サディズム=イロニー/マゾヒズム=ユーモアという対比について詳論する。一方で、サディズム=イロニー（以下、Sと略す）は「無形態」なカオスへと向かうが、他方、マゾヒズム=ユーモア（以下、M）は、与えられている——世界の、自他の——「形態」を壊すことなく、別の仕方へと生成変化させる。S/Mは〈速度の差異〉を持つ。Sは、全形態を急いで「否定」し、その彼岸の《欠如》を求める。そうした急ぎの手前で、Mは、所与の形態について、その正当性を「否認」し、その別の仕方でのイマージュを展開する。Sは〈構造主義的ホーリズム〉としての超越論哲学に対応するが、Mはそこから逃れることであり、個体化の要請としての経験論への傾きを示している。

第8章「動物への生成変化——貧しさと無関心」。ふたたび『千のプラトー』に戻り、動物的有限性に対するドゥルーズの肯定評価を分析する。従来の研究では、ドゥルーズの動物論は、スピノザ的「エチカ=エトロロジー」（生態学的倫理）として解釈されることが多い。すなわち、自己の「身体の力能」を開発し、他者のそれと絡みあわせ、自他が一緒に活力を増していく「強度の共同性」を拡大することである。しかし本章では、ドゥルーズは、動物の「環境世界」が、その有限性のために、それにとって無関心な外部へ接しているこ

とも注目していたと解釈する。「待ち伏せる存在」としての動物は、まったく理解＝包摂（comprendre）できない、関心外からの他者の（暴）力に曝される。そこで、そうした剥き出しの暴力に応じて想像される共同性——複数の無関係のただなかで成される、成功の予定なき共同性というテーマを提示する。以上、全章の流れを結論でまとめ、Epilogue では、ミシェル・トゥルニエの小説『フライデーあるいは太平洋の冥界』についてのドゥルーズの分析から、「他人の全き他者」という概念を取りだし、これを本論文において一貫して論じてきた〈シャープ〉に分離した他者として解釈し、終幕する。